

# FD NAGASAKI JUNSHIN CATHOLIC UNIVERSITY Newsletter

第3号

発行日 2014(平成26)年12月1日

長崎純心大学 教育開発推進・高大連携委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894

## 目次:

巻頭言「授業を創る」	1
新たに始められた2つのFD	2
戦略―《授業充実》計画書・報告書の導入と《学生生活アンケート》の実施―	
1. 《授業充実》計画書・報告書提出のシステム化PDCAサイクルの実質化をめざして	
2. 平成25年度《学生生活アンケート》について	
グローバル化に対応した教育の模索〔第2報〕	4
1. 学生主体の国際交流活動「英語で熟議 in Nagasaki」	
2. スペイン・アルカラ大学 (Universidad de Alcalá de Henares) 附属《アルカリングア(Alcalingua)》との協定	
3. 韓国・カトリックサンジ大大学校との共同セミナー	
FDの観点からみた「高大連携プログラム」	5
教職員FD研修会報告―2013(平成25)年度教職員FD研修会の概要―	6
2014(平成26)年度SD委員会活動報告	7
教育開発推進・高大連携委員会活動報告編集後記	8

## 授業を創る

長崎純心大学長 片岡 瑠美子



本学において「学生による授業アンケート」が実施されて10年を経た今年、教育開発推進・高大連携委員会は、「担当教科の中から1教科を選び、『授業充実への取り組み』計画書・報告書」を作成し、提出すること」を全専任教員に求めた。それは、実施された学生による授業アンケート調査のデータが教員に戻された後、授業の充実にどのように活用されているかを個人として、かつ委員会として振り返り、大学として組織的に自己評価することに他ならない。

1回目の「計画書」提出は100%の提出率であったと委員会は順調な滑り出しに満足のようである。計画書に目を通すと、アンケート結果が大いに役立っていることがわかる。アンケート用紙とともに提出される自由記述の授業評価は、教員にとっては怖くもあり楽しみでもあるが、学生から指摘された良い点をさらに充実させ、足りないところを工夫改善していることが学生に伝わるならば、学生の授業参加も積極的になり、アンケート調査にも真剣に臨んでくれることが期待される。教員はそれを真摯に受け止め、自らの経験則に寄りかかった授業から脱却し、学生のうちに社会人として必要な能力、課題発見・探求能力・実行力（ある人はこれを社会人基礎力と表現している）を得させる方策を立てなければならない。

ある高等学校の校長は「学校の活性化は授業改善から」と生徒代表を交えた委員会をつくり、研究・実践に取り組んだ結果、教員のみならず生徒の授業に対する意識変革も見られ、授業改善を柱とすることで学校が変わりつつあると述べている。まさに教育開発推進・高大連携委員会委員長石田憲一教授がいうように、「授業は学生と教員が共に創っていくもの」である。さらに「知恵の道をあゆみ 人と世界に奉仕する」ことをモットーとしている本学では、知識は大事だが、それを知恵に高めていく授業が求められる。

遅くとも2016年5月までには「報告書」が提出される。それは第一段階であり、すぐに目に見える変化は小さいかもしれない。しかし、確実な意識の変化こそが大学の活力となること信じる。「報告書」を期待して待ちたい。



公益財団法人大学基準協会  
大学評価適合認証



# 新たに始められた2つのFD戦略

## —《授業充実》計画書・報告書の導入と《学生生活アンケート》の実施—

### 1. 《授業充実》計画書・報告書 提出のシステム化

—PDCAサイクルの実質化をめざして—

教育開発推進・高大連携委員会 委員長代行  
坂本 雅彦 (児童保育学科教授)

本学では、以前より学生による授業アンケートを全学的に実施しています。その他にも、年間の授業期間中の所定の時期に、教員同士が互いの授業を参観し合って相互に啓発し合うための週を特設するなど、FDの真摯な取り組みを恒常的に行ってきました。しかし、そこには一つ、懸案事項となっていた課題がありました。それは、各教員が授業の評価結果を手にした後、あるいは授業参観を行った後の手続きに関することです。授業アンケート等を通して得られた情報や刺激を、教員が以後の自分の授業の改善にどの程度、またどのような仕方で生かしているのか・いないのかといったことは、ただ本人のみの秘かに知るところにとどまり、可視化されないというのがこれまでの実情でした。

これは、経営学に由来して近年、教育界でも広く知られるようになった「PDCA」サイクルという考え方をを用いて言えば、「P-D-C (=Plan-Do-Check 計画-実施-点検評価)」までの流れを「A (=Act 対処・改善の取り組み)」にどうつなぐかという、肝心の部分が個人の恣意に委ねられていることを意味します。「CからAへ」の必然的かつ恒常的な流れを生み出すような仕組みが、いまだ、システムとして整っていないのです。この状態を放置しておけば、例えば学生から、「私たちが毎回、協力を求められて記入している授業アンケートは、本当に何かの役に立っているのですか」と問われた時、あやふやな答えしかできないことになるでしょう。

今日、大学はさまざまな面で社会への説明責任(アカウンタビリティ)を求められています。FDに関

しても、単にどのような試みをしたのかにとどまらず、その試みが実際にどのような成果を挙げているのかも含めて情報の開示に努めなければならない時代となっています。また、より現実的な問題としては、文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」において、「大学教育の質向上」に組織的に取り組む大学として選定され、財政支援を受けるための条件整備ということがあります。そこでは、選定に先立つ審査において、単に授業評価を実施している・その結果を担当教員に開示しているというだけでは得点ならず、評価結果を「活用」するシステムが整って初めて点数が加算される仕組みになっているのです。

教育開発推進・高大連携委員会(委員長:石田憲一)では、前身の「大学教育センター」の時代から一貫して、実効ある授業評価等の在り方について議論を重ねてきました。その一つの成果として、このほど、上述の「CからAへ」の流れを促すべく委員会が提案したのが、《授業充実への取り組み》計画書・報告書の提出を学内で制度化するという方策です。この提案は、幸いなことに全学的な理解を得ることができ、本年度よりさっそく実施の運びとなったところです。この制度の概要は次のようなものです。

- (1) 全ての専任教員は、担当科目の中から1教科を選び、所定の書式による《授業充実への取り組み》計画書を作成。教育開発推進・高大連携委員会に提出する(2014年度は5月末を提出の期限とする)。
- (2) 各教員はそれぞれの計画に基づき、直近の年度・学期の当該授業において、自らの意図する取り組みを実施する。
- (3) 取り組みを実施した年度・学期の授業が終了し、かつ、授業アンケートの集計とその結果の担当教員への開示が行われた後に、全ての専任教員は《授業充実への取り組み》報告書を所定の

書式により作成。設けられた期限内に教育開発推進・高大連携委員会に提出する（2014年度計画分については、報告書は、前期科目の場合は2015年11月末、後期科目又は通年科目の場合は2016年5月末を提出の期限とする）。

(4) 上記の計画書及び報告書は、学長、学部長、各学科長、教育開発推進・高大連携委員会委員長と委員会メンバーによる閲覧に供される。

この制度の導入にあたり、委員会のなかでは、どれだけの教員が計画書提出の要請に実際に応じてくれるだろうかと危ぶむ声もありました。しかし、結果的には100%の教員から提出がなされ（写真は提出された計画書の見本）、本学の教員全体としてのFDに対する意識・意欲の高さが証明されました。

もちろん、理想的な授業の実現は、教員個人の努力や工夫のみによってなされるのではなく、学生の

質や施設・設備上の条件等を含めた、様々な要素の相乗効果こそがそれを可能にするというべきでしょう。とはいえ、教員の意識的・計画的な取り組みが授業充実の「必要十分条件」

ではないにせよ、

少なくとも「必要条件」であることは疑い得ません。緒に就いたばかりの制度ですが、この先、定着して、本学がPDCA サイクルの実質的に機能している大学として全国に名を馳せる日が来るのを期待したいと思います。



## 2. 平成25年度 学生生活調査 アンケートについて

教育開発推進・高大連携委員会  
米倉幸生 (現代福祉学科准教授)

目的：平成20年12月中央教育審議会総会において、『学士課程教育の構築に向けて』という答申が取りまとめられた。そのうち、第2章「学士課程教育における方針の明確化」第2節「教育課程編成・実施の方針について」の2、「単位制度の実質化」の中で『我が国の学生の学習時間が短く、授業時間外の学修を含めて45時間で1単位とする考え方が徹底されておらず、学習時間の実態を国際的に遜色ない水準にすることを目指した総合的な取組が必要。』と、述べたうえで、大学に期待される取組として次のように指摘している。『・学生の学習時間等の実態把握、授業計画の明確化、必要な授業時間の確保など』（文部科学省－「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会答申の概要－：URL=[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/siryo/attach/1247211.htm)) 指摘された「学習時間の短さ」が、学生の意志によるものか、そうせざるを得ない事情によるものかは明らかにされていない。そこで日常生活を把握するためアンケートを実施した。

学生生活調査アンケート (H26. 1 / 17~24 実施)	
対象	全学科
総数	455名 (1年生261名・3年生194名)
質問項目 (全12項目)	1. 平日と土日の授業外の学習時間 2. 読書量 3. 新聞やニュースを読んだ (見た) 割合 4. 平日及び休日前の睡眠時間 5. 通学時間 6. 平日に朝食を食べる頻度 7. 平日と土日の1日当たりのアルバイトの時間 8. バイト先からの帰宅時間帯 9. 平日の朝食をとる頻度 10. 平日平均アルバイト時間 11. 土日の平均アルバイト時間 12. その他

アンケート結果 (抜粋)		
学習時間 (平日)	0~1時間	190名
	1~2時間	138名
1ヶ月間の読書の量	0冊	163名
	1冊	155名
	2~3冊	114名
1週間に新聞を読んだ	全く読んでない	277名
	1日分	85名
インターネットでニュースの欄を読んだ頻度	毎日	125名
	1~2日	135名
	全く読まなかった	49名
平均睡眠時間 (平日)	5~6時間未満	169名
	4~5時間未満	100名
通学時間	1時間~1時間30分	150名
	3時間~3時間30分	6名

部活・ボランティアの項目が入っていないことや、例えば通学時間・学習時間の項目同士の相関関係が明らかではないなどの不備もあるが、今後これらの基礎データをもとに分析と追加調査を重ねて、健康で充実した大学生生活のサポートを行うことが期待される。

# グローバル化に対応した教育の模索

第2報

## 1. 学生主体の国際交流活動「英語で熟議 in Nagasaki」

人文学部長 荒木 慎一郎

明治末期に、日本人と外国人の交流の場所として設けられた「出島内外倶楽部」に100年前の熱気が蘇りました。

10月19日（日曜日）、史跡出島の中にある「内外倶楽部」に集まったのは、日本人と外国人合わせて50人。みんなで「長崎を外国人にとって魅力的な町にするには、どうすればよいか」を英語で話し合いました。

長崎県国際交流協会の助成を受けて、この企画を実施したのは本学の学生グループ「Global Friendship Club」の8名。

韓国、中国、スリランカ、フィリピン、ケニア、ニュージーランド、カナダ、アメリカ、イギリス、フランスなど13カ国25人の外国人と、25人の日本人が「出島異文化との接触」「平和と祈り」「観光地」「日常生活」の4つのグループに分かれて、真剣に議論を行いました。参加者は、学生、教員、主婦、会社員、大学教授、医師など。

英語による総合司会、挨拶、ゲストの通訳、グルー

プごとの司会進行とまとめなど、すべて本学の英語情報学科と児童保育学科の学生が担当しました。

参加した外国人からは「とても素晴らしい経験だった」「またこのような機会があったら、ぜひ参加したい」という肯定的な感想が聞かれました。

ゲストのひとり、元文部科学省大臣官房審議官の寺脇研さんは「英語で熟議を行うのは、全国でも初めて。学生の活躍が素晴らしい」としきりに感心しておられました。

「英語で熟議 in Nagasaki」の結果は、学生たちが報告書にまとめ、長崎市、長崎県の関係機関、観光施設、新聞社などに持参する予定です。



## 2. スペイン・アルカラ大学 (Universidad de Alcalá de Henares) 附属《アルカリングア(Alcalingua)》との協定

教育開発推進・高大連携委員会委員 滝澤 修身  
(比較文化学科教授)

アルカラ大学は、1499年にシスネロス枢機卿によって創設されたヨーロッパでも長い伝統を有する大学である。この大学の起源は、1293年にカスティールヤ4世によって創立された「ストゥディウム・ヘネラーレ」(総合学院)に遡る。同大学の位置するアルカラ・デ・エナレスの町は、『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスの出生地として、また日本の天正少年使節団が立ち寄った町として知られている。アルカラ大学の幾つかの学棟は設立当初の姿をそのまま留めており、大学周辺の歴史地区とともに、ユネスコの世界遺産に登録されている。設立当初は宗教や神学が中心で、聖職者による教育が重要な役割を担っていた。その後、人文学、法学、文学の研究が盛んとなり、フランシスコ・ケベド、ロペ・デ・ベガ、トマス・デ・ビジャヌエバラを輩出した。また、イエズス会創始者イグナティウス・デ・ロヨラがアルカラ大学で学んだことでも有名である。アルカラ大学は首都マドリードから東にほぼ30kmの場所にあり、現在、教員数は1750人であり、キャンパスでは2万6千人の学生が学んでいる。

同大学には、《アルカリングア》と呼ばれる外国人向けのスペイン語・文化コースを提供する機関が存在する。また《アルカリングア》は、スペイン内外の学生を対象にスペイン語教員養成も行っている。同大学は、スペイン語教育機関として確固たる地位を確立しており、最新の応用言語学を駆使した教材開発も盛んである。同大学出版局により各種スペイン語テキスト、辞書類等が出版され、世界各地に広く普及している。

長崎純心大学は、世界のグローバル化に対応すべく、ヨーロッパ圏の大学機関との大学提携を模索し始めた。その一環として選ばれたのがこのアルカラ大学である。長崎純心大学には、今年度4月より国際提携委員会が設立され、5月からアルカラ大学の《アルカリングア》との学術提携が検討された。そ

の後、運営委員会で本件が議論され、6月に教授会に諮られ承認された。その後、本学とアルカラ大学附属《アルカリングア》との間で、大学協定が正式に締結された。現在、本大学教務課を中心にアルカラ大学との単位互換留学が検討されている。

ここで、《アルカリングア》のスペイン語コースについて簡潔に紹介してみたい。スペイン語コースには、通年コース、3か月コース、夏期コース、短期集中コースなどがあり、コース期間中には、語学のみならずスペイン文化も学習できる。また、スペイン語能力試験(DELE)対策コースを受講し、国際的に通用する資格の取得に挑戦することも可能である。DELEとは、スペイン文部省認定の「外国語としてのスペイン語検定試験」であり、世界100カ国以上で実施される語学レベルを国際的に保証するものである。更に、スペイン語を数年間学習した上級者は、スペイン語教師養成コース、観光学、法学、健康科学を履修することも可能である。コース開催期間中の課外活動も充実しており、映画鑑賞、フラメンコ鑑賞、美術館めぐり、マドリード散策、スペイン国内の歴史都市周遊などもできる。《アルカリングア》では学生の要望に応じてホームステイまたは学生寮での宿泊を手配してくれる。同コースには、日本人アドバイザーも常駐しているため、学生は学習や生活で困難をきたした時、気軽に相談することが可能である。今年度から、長崎純心大学ではスペイン語の授業が開講された。今後、アルカラ大学で多くの純心大生が学ぶことを期待してやまない。



### 3. 韓国・カトリックサンジ大学校との共同セミナー

児童教育支援センター所長 坂本雅彦  
(児童保育学科教授)

長崎純心大学（現代福祉学科・児童保育学科）と、韓国カトリック・サンジ大学校（社会福祉科・幼児教育科）の間で結ばれた教育研究協力協定に基づいて、2回目に当たる共同セミナーが、10月18日(土)、本学において開催されました。今回のセミナーは、本学児童教育支援センター主催の公開講座（通算18回目）を兼ねて実施するかたちをとり、《子どもの福祉と教育を考える―両国の子どもたちの幸せな未来のために―》という統一テーマの下、次の4つの研究発表と質疑応答が行われました。

- (1) 東日本大震災後における児童の状況と支援の在り方について一被災者支援ボランティア活動を通して  
松永公隆（現代福祉学科教授）
- (2) 「グローバル化」の時代に日本の学校の道徳教育はどこへ向かうのか？  
坂本雅彦（児童保育学科教授）
- (3) 普遍主義の観点から考える地域児童センターの活性化の方策  
チョン・イルキョ（カトリック・サンジ大学校社

会福祉科教授）

- (4) 専門能力の向上のための幼児教師養成システムの発展方向  
イ・ソンスク（カトリック・サンジ大学校幼児教育科教授）



日本と韓国、それぞれの国の子どもや子どもに関わる人々が置かれている“今”を鮮やかに描き出すと共に、「子どもたちの幸せな未来のため」に必要なものは何かを福祉又は教育の視点から聴衆に問いかけた、啓発的な内容を含むものでした。

休憩時間には、来学された韓国の先生方を歓迎するため、児童保育学科・松本俊穂ゼミの学生たちによる和太鼓演奏が披露され、国際平和と友好への祈りを込めた力強い響きが、海の向こうまで届けとばかりに鳴り渡りました。

## FDの観点からみた「高大連携プログラム」

教育開発推進・高大連携委員会 委員長代行 坂本雅彦（児童保育学科教授）

本学においてFD推進のための中核的な業務を担う部署は、昨年度までは「教育開発推進委員会」と呼ばれていましたが、平成26（2014）年度より高大連携の文字が加わって、同委員会は「教育開発推進・高大連携委員会」となりました。同時に、この委員会は本学の校務分掌組織上、常任委員会を構成する委員会の一つとして新たな位置づけを獲得しました。

これまで、本学と、同一法人に設置する純心女子高等学校との連携・協力に成る各種のプログラムは、組織的にというより、特定の教員の奉仕的な精神と尽力に依存するかたちで（または特定学科の独自の取組みとして）、それなりに活発に行われてきました。このたびの学内委員会の改組は、そうした「高大連携プログラム」を組織的に推進し、充実させていこうとする大学の方針の表れであると共に、それらのプログラムが、「教育開発推進（FD）」というもう一つの使命と無関係ではないことを示唆していると言えます。

本年度に委員会として企画した高大連携プログラムのうち、2014年11月現在、既に終了したものとしては、次の2つがあります。

- ① 高校2年生「総合的な学習の時間」への大学教員による出張授業（4月～7月の毎週水曜1時限目 計11回×文系コース3学級）  
……大学の5つの学科から代表の教員を派遣し、どの学級の高校生も5学科全ての授業を受講することができるようプログラムを工夫しました。授業の形式は「生徒参加型」であることを旨としました。事後の感想文を見ると、現代福祉学科の授業での車椅子・白杖体験、人間心理学科の授業での性格診断（エゴグラム）などが、特に強い印象を高校生に与えたことが窺えます。

- ② 高校1年生（希望者）対象企画「大学へ行ってみよう！」（大学の授業見学と、学生サポーターの案内によるキャンパスツアー。10月6日(月)10:00～13:10)

……50名ほどの高校生が小グループに分かれて、サポート役の大学生と一緒にキャンパス内を見学しました。この企画の趣旨は、いわゆるオープンキャンパス等での大学紹介や高校生向け特別授業ではなく、「普段着の」大学の授業、大学の雰囲気や高校生に体験してもらおうとあります。参加者の感想として、教員と案内の学生への感謝と共に、「将来のためにこれからの高校生活をがんばりたい」という前向きな決意が多く語られました。

大学教員の側では、高校生を相手に授業をする経験（上記①）から伝わりやすく話をするコツなどを学び、第三者である高校生立会いの下で講義や演習等を行う経験（上記②）からは、自らの担当科目の役割と意義に関する〈外部＝社会〉への説明責任ということを意識しながら授業を行うすべを学び得ることでしょう。先に「FDと『高大連携』は無関係ではない」と記した所以です。



# 教職員 FD 研修会報告

## —2013（平成25）年度 教職員 FD 研修会の概要—

教育開発推進・高大連携委員会 委員長代行 坂本 雅彦（児童保育学科教授）

2013年度の教職員研修会は、平成26年3月7日(金)、「ポートフォリオを活用した大学教育のあり方について」というテーマで実施しました。本学におけるポートフォリオは、一部の教員が自らの研究課題として追究したり、教育実習の授業等で試験的に実施したりすることはあったものの、多くの教職員にとっては、いまだ馴染み深い話題とは言えません。そこで、この度、大学教育の世界における当分野の研究ならびに実践の第一人者とも言うべき方を外部から講師としてお招きし、ポートフォリオ導入の意義と可能性について教職員一同、学び合おうというのが、今回の研修会の趣旨でした。

午前中は、帝京大学高等教育開発センターの土持ゲーリー法一教授より、《ポートフォリオが日本の大学を変える》と題した講演をいただきました。お話は、なぜポートフォリオが重要なのかというところから始まり、ポートフォリオの種類と、「学修ポ



ートフォリオ」についての説明、さらには、学修ポートフォリオも含めて学生の能動的な学び（アクティヴ・ラーニング）を培うために考案された数々の授業実践の

例（コンセプトマップ、MIT方式試験、反転授業 etc.）や、学生の「評価」についての新しい考え方にまで及びました。土持先生の語り口はとて親しみやすく、フロアからの質問にも快く応じていただきました。

午後は、講演と分科会の二部構成で行われました。まず、(株)ハウインターナショナルの濱野彰彦氏をお迎えし、《ポートフォリオの具体的な活用について》ということで、ご自身の開発・構築された某私立大学におけるシステムをご紹介いただきました。そのシステムとは、従来、異なる複数の部署がそれぞれで学生の情報を管理し、学生へのサポートも相互の連絡なしに、別個に行なってきた体制を改め、情報を共有し、連携して学生のサポートに当たるように学生情報の管理システムを一元化し、「学生カルテ」としてeポートフォリオを構築していく、というものです。

私たちから見れば大変先進的な事例紹介に刺激を受けた後、分科会に分かれ、この日の講演から感じたこと、本学の課題、目指すべき方向性等について、1時間余り意見交換を行いました。総じて、教員にとっては学習者主体の授業設計について、職員にとっては部署を越えた連携と情報共有の重要性について意識を高める良い機会になったのではないかと思います。

### 【参加者の声（事後アンケートの自由記述より抜粋）】

- ・この10数年にわたる大学改革の流れと全体像がよく見えてよかったです。
- ・具体的な事例を交えた話を聴くことができ、勉強になりました。
- ・初めて知る言葉が多くありました。これをきっかけに今後調べたり勉強したいと思いました。
- ・eポートフォリオの実例が紹介され、「ポートフォリオ」がどのようなものか、初めてイメージできた気がします。教員と職員との横のつながりをつくるためにも、ぜひ、学内で運用していただきたいです。
- ・発表のあったシステム等があるとよりよい学生指導ができるように感じた。学生の全体像が把握できるようになると良い。教員と職員の仕事がつながる感じがしました。(ex. キャリア、教務、学生)
- ・システム化していただいたらかなり、重複しているところがスリム化するのではないかと思います。
- ・すごいシステムを見せて頂き、おどろきました。でも、最後は「人」なのだということが印象的でした。
- ・目的適合性と質の保障をどのように具現化するか、考えていきたい。

- ・教職履修カルテが、現状（学生が教員との面談の前に記入）のままではあまり効果が期待できないので、活用の在り方（教員の関わり方）を明確にしていかなければならないと思った。
- ・学内に既にあるいろいろなシステムを活用して学生のカルテのようなシステムを作るのは、難しくないと思いますが、その運用やどのように活用するのかが、大変難しいのではないのかと思いました。
- ・他大学におけるポートフォリオ導入に伴う問題点についても知りたかったと思います。（負担の増減など）
- ・紹介していただいたソフトは学生自身の学び（ポートフォリオ）という面と、大学の学生へのサポート体制のためという2つの使い方があり、両方大切だとは思いますが、どうしても後者の必要性について改めて考えるきっかけとなった。
- ・ポートフォリオをより具体的に、データ（数値）化して見れることは、とてもよい事だとは思いますが、使い次第で人をデータのみで判断してしまう危険性はないのか、また、個人情報の問題はないのか。いろいろ説明していただいたが、やはり心配な点は残ると思いました。導入にあたって運用面での工夫が必要だと思いました。
- ・講演の後に分科会をしたことで「ふりかえり」ができ、よいスケジュールだと思いました。

# 2014(平成26)年度 SD 委員会活動報告

SD 委員会委員長  
中尾 剛  
(施設課長)

本学に、SD 委員会が発足して今年で6年目になります。これまで様々なテーマを設定し、年2回のペースで研修会を行ってきました。

今年度は平成26年9月18日大会議室において、純心中学校・純心女子高等学校副校長の大町謙治先生を講師としてお招きし「文教の中・高を知る」というテーマでお話をいただきました。



これまでいろいろな企画があり、それぞれが素晴らしい研修会だったため、今年度から委員長を引き受けるに当たり、かなりのプレッシャーとなりました。

まず、当然ながらどのような企画をするかメンバー4人で検討しましたが、なかなかいいアイデアが浮かびませんでした。どのような形の資質向上をめざすべきか、どのような研修会が資質向上に繋がるのか。研修を受ける側から企画する側へ変わると考え方もかなり違うものだと思います。企画するにも、それなりの知識、学習が必要で、これもひとつの資質向上ではないかと思うこともありました。

さて、なかなかテーマが決まらない中、メンバーの中からどこからともなく、来年「学園創立80周年」を迎えるので、それにちなんだ企画はどうだろうか。といった意見が上がりました。「学園創立80周年を迎えるのに、大学以外の施設のこと、ほとんど知ら

ない」、「幼稚園で何クラスあるの?」など、これで本当にいいのだろうか、という思いが今回の研修会のきっかけでした。

早速、何が知りたいか、どのようなことを聞きたいか、アンケートをとり大町先生のもとへ走りまわりました。今回の経緯、趣旨、目的をお伝えしたところ快く引き受けていただきました。

準備時間が非常に少ない中、日頃見ることのない資料をたくさん用意していただき、貴重なお話をいただきました。その中で私が感じたこと、印象に残っていることは、中学、高校、大学は別々ではいけない、連続性があるものだという事です。どこかが弱くなると全体が弱くなるのではないかと。また、人格の形成はどんな人間とどんな先生と巡り会ったかによって変わってくる事。先生の姿、職員の姿、対応の仕方によって、多変に変わる可能性がある事など、非常に感銘を受けるお話を聞くことができました。

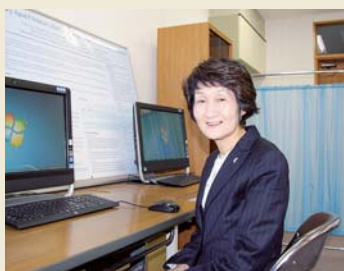
今回、企画をとおして、中学、高校のことを「知ることができた」もしくは「知るきっかけになった」ということであれば、今回のSD研修会は成功だと思います。今後は、「大学のこと」「法人のこと」等、勉強する機会を検討中です。



## ひといき

### 学生のニードに 応えるということ

教育開発推進・高大連携委員会委員  
鈴木 千鶴子  
(英語情報学科教授)



アメリカの大学では当たり前のように行われてきた「学生による授業アンケート」が本学に導入された当初の抵抗感とワクワク感を、今では懐かしく思うほどに回を重ねてきました。その間十年余り、学期末に成績表を開いて見る小学生や中学生のように、喜んじりがかかりしたりを繰り返してきました。その多くは落胆する経験でしたが、今年度前期の結果は自分でも驚くほどに所謂成績が上がっていました。成績が悪かった時は勿論のこと、良かった場合も、「何がそれで分かるのか?」との疑問を抱きます。そこで、その成績が良くなった理由を少々推理してみました。その一つは意図的・実験的に「ゼミ」を対象にしたことによる当然の結果でしょう。では、ゼミのように少人数であれば良いのか?と考えると、もう一つの対象は40名近くの受講生で、しかも昨年度の結果は自分が張りきったほどには芳しくなかった科目でした。昨年度と異なる点は、TOEIC テスト対策のe-ラーニング学習を授業時間と成績評価基準に三分の一程度入れ込んだことでした。ゼミと同様に、学生にとって自分がやりたい、伸ばしたいと思っていることを学べたということが大きく影響したと思われます。つまり、学生の(少なくとも短期的な)ニードに応えたからといえましょう。実は、もう一つ今年度の新しい経験として看過できないことがあります。それは、私が教育開発推進・高大連携委員会委員になったということです。ですから、この委員は全員持ち回りで担当すると、大学全体の授業評価が上がるのではないかと思う次第です。

## 教育開発推進・高大連携委員会活動報告

### 2013(平成25)年度 後期

#### ■教育開発推進委員会

- 第3回 平成24年11月27日
- 第4回 平成24年12月12日
- 第5回 平成25年1月30日
- 第6回 平成25年2月13日

#### ■学生による授業アンケート

- 前期 平成25年7月9日～7月28日
- 後期 平成26年1月21日～2月4日

#### ■教員相互による授業参観

平成25年5月5日～11月16日

#### ■教職員FD研修会

平成26年3月7日 10:00～15:00

### 2014(平成26)年度

#### ■教育開発推進・高大連携委員会

- 第1回 平成26年4月16日
- 第2回 平成26年5月7日
- 第3回 平成26年5月21日
- 第4回 平成26年6月11日
- 第5回 平成26年7月9日
- 第6回 平成26年10月1日
- 第7回 平成26年10月22日

### 教育開発関連

#### ■学生による授業アンケート

前期 平成26年7月7日～7月28日

#### ■教員相互による授業参観

平成26年11月4日～11月17日

#### ■出張等

\*平成26年8月29日・30日

第4回 大学コンソーシアム八王子FD・SD  
フォーラム  
IRを通じた教育改革－未来を切り拓く人材  
づくり－

### 高大連携関連

#### ■各学科教員が純心女子高等学校へ出張授業

\*純心女子高等学校2年生対象(3クラス)  
平成26年4月23日～7月9日毎週水曜日1時  
間日

#### ■高大連携企画 『大学へ行ってみよう』

\*純心女子高等学校1年生対象 57名  
平成26年10月6日(10:00～13:10)  
三ツ山キャンパスで大学生に混じって講義に  
参加するなど大学生活を実際に体験し、大学  
がどのようなところかを知る企画

#### ■英語情報学科の授業見学

\*純心女子高等学校2年生英語コース37名  
平成26年10月23日(12:00～15:20)

#### ■純心高等学校教員と純心大学教員の打ち合わせ

平成26年4月10日・平成26年5月2日  
平成26年8月19日・平成26年11月25日

### 図書・雑誌案内

※これらの本は、教育開発推進室で閲覧できます。貸出しを希望される方は、図書館で手続を行ってください。

#### ■定期購読雑誌等

「高等教育研究」  
日本高等教育学会編 玉川大学出版部発行  
「IDE 現代の高等教育」 IDE 大学協会発行  
「INTERNATIONALREVIEWOFEDUCATION」  
UNESCOINSTITUTEFORLIFELONGLEARNING

### 編集後記

委員長が研修中で不在のなか、各方面のご協力により、無事《FD Newsletter》第3号をお届けできる運びとなりましたことを御礼申し上げます。

記事中にもありましたが、本年度から長崎純心大学では、全教員が担当の一科目に関し、改善・充実へ向けた取り組みを行う旨の「計画書」と、事後の点検・評価を記した「報告書」を提出するという、新たな試みを始めました。これは、

FD というものを単なる掛け声だけに終わらせず、実際の行動につなげるための大きな一歩だと思えます。本学が“本気で”FDに取り組む大学として、社会的に認知されることを願ってやみません。

平成26年度 教育開発推進・高大連携委員会

石田憲一(委員長) 坂本雅彦(委員長代行・「FD Newsletter 第3号」編集責任者)  
滝澤修身 米倉幸生 濱田洋子 鈴木千鶴子 細田美恵

長崎純心大学 教育開発推進・高大連携委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894 URL <http://www.n-junshin.ac.jp/univ/>